

日本語版状態自尊心尺度の作成

村上史朗*・中原洪二郎**

Development of the Japanese version of state self-esteem scale

Fumio MURAKAMI* Kojiro NAKAHARA**

要 旨

状態自尊心 (state self-esteem) は、その理論的重要性にもかかわらず測定指標が充実していると言
い難い。本研究の目的は、国際比較研究に用いることのできる日本語版状態自尊心尺度の作成である。
状態自尊心の尺度として国際的に最もよく用いられているHeatherton & Polivy (1991) を、言語の等価
性を確保した翻訳を行うことで日本語版項目を作成した。研究1では、尺度の総合得点について高い内的
一貫性を有することが確認された。その一方で、下位尺度については先行研究と一貫した構造が示され
なかった。また、研究1, 2 を通じて尺度が十分な併存的妥当性を有していることが確認された。

【キーワード】 状態自尊心、信頼性、妥当性

問題と目的

状態自尊心の重要性

自尊心 (self-esteem) には様々な定義があるが、ここでは「自分自身による自己への肯定的評
価」とするBaumeister (1998) の定義をもとに論をすすめる。人が自尊心を維持したい、高めた
いという欲求は多くの社会心理学における理論の前提となっており、自尊心の概念化と測定も重
要な一面を担ってきた。自尊心を捉える際、その安定性の観点から特性自尊心 (trait self-esteem)
と状態自尊心 (state self-esteem) の2つに区分される。特性自尊心とは、状況により短期的に変
動することなく、ある程度安定した個人特性として機能する自尊心を指す。一方、状態自尊心と
は、他者からの受容や評価、課題遂行の結果などに伴って変動するものとされる。理論的には両
者は区別されてきたものの、これまでの自尊心に関する社会心理学における理論の多く、特に2000
年以前のものでは、自尊心をほぼ特性自尊心として捉えおり、特性自尊心と他の心理的特性や行
動との関連を検討してきた (遠藤, 1999)。

近年になって自尊心を状況や他者との関係性によって変動する状態自尊心としての側面に注目
する研究が増加している。例えば、ソシオメーター理論 (e.g., Leary & Baumeister, 2000; Leary,
平成27年11月5日受理 *社会学部心理学科 准教授 **社会学部総合社会学科 教授

Tamber, Terdel, & Downs, 1995) では、自尊心を自分が他者から受容されている（拒否されている）程度を示す主観的な指標（ソシオメーター）として捉えている。ここで、他者からの受容や拒否は安定的なものではなく、状況によって変動するものと想定されている。すなわち、他者から受容されている感覚によって自尊心が上昇し、拒否されている感覚によって自尊心が低下することになる。ソシオメーター理論における自尊心は、他者から排除されるというリスクを自分自身に知らせるという危機検出の機能を持ち、その性質上他者との関係性に伴って変動することが必要となる。

また、近年検討が進んできているIAT（the implicit association test; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）などで測定される潜在的自尊心についても、状況の影響によって変動することが明らかになってきている。例えば、Rudman, Dohn, & Fairchild（2007）では、自己のアイデンティティに対する脅威にさらされた場合に、潜在的自尊心が補償的に高揚することを示している。IATで測定される潜在的自尊心は複数回の測定の相関が高いことから、潜在的自尊心の指標の中でも再テスト信頼性が高いとされており、これは特性自尊心の特徴でもある（Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000）。そのため、潜在的自尊心が状態自尊心そのものであるとは結論づけられないが、少なくとも状況要因による変動は確認されていることから状態自尊心の要素も含んでいると考えられる。潜在的自尊心の性質を探る上でも、状態自尊心との関連を検討することが必要となってくる。

このように状態自尊心の測定に関する理論的必要性は高いものの、現時点では状態自尊心を測定する日本語の尺度については十分に整備されているとは言えず、特に英語圏の先行研究と対比可能な尺度が存在しない。本研究では、主要な状態自尊心尺度のひとつである、Heatherton & Polivy（1991）の邦訳版を作成することを目的とする。

日本語版状態自尊心尺度の現状と問題点

自尊心の指標として最もよく用いられるRosenberg（1965）の自尊心尺度は全体的な自己評価を測定するものであるが、評価的なフィードバックによってその得点が変わらないことが知られている（小林, 2004）。Rosenberg（1965）の尺度は主として特性自尊心を測定する指標として用いられており、自尊心の安定性に注目した研究で用いられている。そのため、実験操作の影響を受けて変動する状態自尊心を測定するという目的には適していない。

状態自尊心の尺度として現時点で利用可能なのは、Heatherton & Polivy（1991）と、阿部・今野（2007）によって作成されたものである¹⁾。Heatherton & Polivy（1991）の尺度は、その因子構造から「パフォーマンス自尊心（performance self-esteem）」「社会的自尊心（social self-esteem）」「外見的自尊心（appearance self-esteem）」の3つの下位尺度からなる計20項目で構成されていた。ただし、後続研究では下位尺度得点を用いずに、20項目の総合得点を用いるものもある（例えば、Rudman et al., 2007）。館・宇野（2000）は、この尺度を参考に日本版状態セルフ・エスティーム尺度を作成している。ただし、館・宇野（2000）は、国際比較研究を念頭に置いておらず、あくまでも「日本で用いる」状態自尊心尺度の開発を目的としていた。そのため、国際比較研究で用いるためにはいくつかの問題がある。1つは、翻訳の問題である。比較文化研究におい

て等価性 (equivalence) の問題は非常に重要であるが (van de Vijver & Leung, 1997)、項目の日本語訳を行う際に言語の等価性を保つ手続きが取られておらず、オリジナルの尺度との対比が適切であるかが不明である。また、館らはHeatherton & Polivy (1991) の邦訳版作成を目的としていたのではなく、この尺度を「参考にした」尺度作成を目的としていたため、オリジナルの因子構造が確認されるかを確認的因子分析で検討していない。探索的因子分析は行われているものの、オリジナルとは異なる5因子を抽出している。確認的因子分析を行えばオリジナルと同様の因子構造が確認されるのか、また因子構造が異なっていたとしてもそれは日米の状態自尊心の概念の違いであるのか、翻訳の問題であるのか、など不明な点がある。そのため、国際比較研究においてそのままHeatherton & Polivy (1991) の邦訳版として用いることは適切ではないだろう。

阿部・今野 (2007) では、Rosenberg (1965) の自尊心尺度をベースに、教示文と項目を一部改変した測定を行った。具体的には、「これは、あなたが「いま」この瞬間に考えていることを測るためのものです。」と教示し、各項目文を「いま、・・・感じる」となるように改変していた。内的一貫性、構成概念妥当性、弁別的妥当性が確認されており、日本語で測定する状態自尊心の尺度としては十分なものであると言える。また、特性自尊心の指標として最もよく用いられているRosenberg (1965) をベースにしているため、特性自尊心と状態自尊心の違いを確認しやすいという利点もある。

一方で、阿部・今野 (2007) も国際比較研究については念頭に置いておらず、主成分分析の結果からRosenberg (1965) の10項目中1項目を除外した9項目で尺度を構成していた。除外された1項目 (自分をもっと尊敬できるようになりたい) は、日本語では他の項目と相関が低いことが指摘されており (田中・上地・市村, 2003)、日本人のみを対象とする研究では除外することが適切であろう。ただし、項目数が異なることで、先行研究との比較は困難になる。

このように、日本語のみで行う研究については有用な状態自尊心尺度が存在するものの、国際比較研究でそのまま使える形にはなっていないという問題がある。本研究では、国際的に最もよく用いられている尺度のひとつであるHeatherton & Polivy (1991) を、言語の等価性を確保して新たに日本語訳し、その信頼性と妥当性を確認することを目的とする。

研究 1

研究 1 では、Heatherton & Polivy (1991) の新訳を作成し、その内的一貫性と妥当性の検討を行うことを目的とする。特に因子構造については、オリジナル (Heatherton & Polivy, 1991) と館・宇野 (2000) で異なっており、今回の新訳でオリジナルと同様の因子構造が確認されるかを中心に検討する。

方 法

状態自尊心尺度日本語版項目の作成

バックトランスレーション法を用いた。まず、オリジナルの20項目を第一著者が日本語に翻訳し、それらの日本語項目を、オリジナルの尺度を知らない研究者が英語に訳した。その後、英語に再翻訳された項目とオリジナルの項目が同義であるかを合議で確認し、一部訳語の調整を行った。

調査概要

20歳～69歳の成人男女900名（男性450名、女性450名、平均年齢44.5歳）を対象としたインターネット調査を行った（調査時期：2015年2月）。性別と年代（20代、30代、40代、50代、60代）について均等割付を行い、各セル90名のデータを得た。実査は、(株)クロス・マーケティングに委託して実施した。

測定した指標

質問紙に含まれた尺度は、状態自尊心尺度日本語版、特性自尊心尺度（Rosenberg, 1965）、SLCS（Tafarodi & Swann, 2001）、日本語版PANAS（佐藤・安田, 2001）であった。

結果と考察

単純集計と信頼性係数

各項目の平均値、標準偏差と信頼性係数（クロンバックの α ）並びに項目を削除した場合の信頼性係数を表1に示した。平均値は全ての項目で尺度の中央値である3からプラスマイナス0.5の範囲内であり、極端な偏りは見られなかった。また、信頼性係数は0.877と十分な値を示しており、Heatherton & Polivy（1991）と同様に、全項目の加算平均を総合得点として扱う。

表1 各項目の内容と信頼性分析の結果

	項目を削除した場合の α	平均値	標準偏差
1. 自分の能力に自信がある	.870	2.72	.951
2. 自分が成功していると見られるか失敗していると見られるかが気	.879	3.23	.943
3. 今の自分の体型に満足している	.877	2.51	1.017
4. 自分の、ものごとをこなす力にいらだちを覚える	.869	3.02	.928
5. 自分の読解力に問題があると思う	.869	3.23	.930
6. 他の人たちが自分を尊敬し、評価していると思う	.870	2.60	.876
7. 自分の体重に不満だ	.877	2.81	1.119
8. 私は、自意識過剰だと思う	.879	3.22	.860
9. 私は、人並みには知的だと思う	.873	3.13	.872
10. 自分自身に不満を感じている	.864	2.74	.939
11. 自分に満足している	.867	2.74	.895
12. 今の自分の外見を気に入っている	.874	2.55	.909
13. 他の人たちが自分をどう思うか気にしている	.875	3.02	.963
14. 自分の理解力に自信を持っている	.870	3.01	.877
15. 今の私は、他の人たちより劣っていると思う	.864	3.07	.929
16. 私は魅力的でないと思う	.864	2.93	.905
17. 自分がどのような印象を与えているかが気になる	.874	2.96	.879
18. 今の私は、他の人たちより学力が低いと思う	.867	3.18	.934
19. 私は、自分がうまくやれていないような気がする	.864	2.92	.919
20. 自分がばかみたいに見えていないか気になる	.868	3.27	.922
全体の α 係数	.877		

因子構造の検討

Heatherton & Polivy（1991）と同様に、「パフォーマンス因子」「社会性因子」「外見因子」の3因子構造が見られるかを確認するため、確認的因子分析を行った。その結果、モデルの適合度は非常に低く（AGFI=.643, CFI=.676, RMR=.098）、英語版と同様の3因子構造は確認されなかった。各因子から項目へのパスについて標準化係数の推定値が0.4を下回っていたのは、社会的自尊

心因子の「自分が成功していると思われるか失敗していると思われるかが気になる」「私は、自意識過剰だと思う」の2項目であった。

表2 状態自尊心尺度項目の探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）

項目番号		パフォーマンス	外見的	社会的	共通性	オリジナルの因子
18	今の私は、他の人たちより学力が低いと思う(*)	.822	-.227	.125	.562	---
9	私は、人並みには知的だと思う	.769	-.134	-.255	.422	---
14	自分の理解力に自信を持っている	.703	.044	-.250	.495	---
5	自分の読解力に問題があると思う(*)	.689	-.145	.076	.405	---
15	今の私は、他の人たちより劣っていると思う(*)	.598	.135	.134	.563	社会的
1	自分の能力に自信がある	.507	.256	-.190	.433	---
19	私は、自分がうまくやれていないように思える(*)	.466	.240	.192	.540	---
4	自分の、ものごとをこなす力にいらだちを覚える(*)	.464	.033	.248	.381	---
20	自分がばかみたいに見えていないか気になる(*)	.460	-.111	.442	.472	社会的
16	私は魅力的でないと思う(*)	.454	.334	.074	.552	---
12	今の自分の外見を気に入っている	-.155	.785	-.130	.465	---
11	自分に満足している	.074	.712	.018	.588	---
10	自分自身に不満を感じている(*)	.068	.613	.302	.631	社会的
3	今の自分の体型に満足している	-.134	.597	-.076	.530	---
6	他の人たちが自分を尊敬し、評価していると思う	.285	.552	-.237	.530	---
7	自分の体重に不満だ(*)	-.096	.429	.103	.166	---
13	他の人たちが自分をどう思うか気にしている(*)	-.131	.069	.784	.579	---
17	自分がどのような印象を与えているかが気になる(*)	-.118	.102	.746	.541	---
2	自分が成功していると思われるか失敗していると思われるかが気になる(*)	-.088	-.106	.731	.482	---
8	私は、自意識過剰だと思う(*)	.109	-.162	.435	.203	---
	因子寄与	6.48	2.69	1.70		
	寄与率	32.41	13.42	8.52		

note:反転項目(*)は反転済み
オリジナルの因子と異なるものには注記を付した。

続いて、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った（表2）。固有値1を基準とした場合4因子が抽出されたが、第4因子（固有値1.084）と第5因子（固有値0.966）の固有値の差は0.078と小さく、第3因子（固有値1.703）までの累積寄与率が54.35%と十分であったため、3因子を抽出した。因子構造は概ねオリジナルのHeatherton & Polivy（1991）と類似しており、各項目の負荷量から、第1因子から順に「パフォーマンス自尊心」「外見的自尊心」「社会的自尊心」に該当した。ただし、オリジナルとは異なる因子に負荷量の高かった項目が3項目存在した。いずれもオリジナルでは社会的自尊心因子に負荷量の高い項目であり、2項目がパフォーマンス自尊心因子に、1項目が外見的自尊心因子に対して最も負荷量が高くなっていた。

上記の結果より、本研究で新たに訳出された項目についても、オリジナルと同様の因子構造は確認されなかった。ただし、5因子構造であった舘・宇野（2000）とは異なり、オリジナルと類似した構造の3因子構造は確認されており、言語の等価性を保つことを目的とした新訳は一定の意義があったものと考えられる。

一方、オリジナルでは社会的自尊心因子に含まれていた7項目中3項目が他の因子への負荷量

が最も高くなっていた。この違いを生み出した要因として、以下の2つの可能性が考えられる。1つは、文化差の要因である。オリジナルで社会的自尊心因子であり、本研究でパフォーマンス自尊心因子の負荷量が高くなっていた2項目は、他者との優劣の比較に関するものであった。日本人は北米人と比べて自己概念に他者との関係性を含みやすいため (e.g., Cousins, 1989; Markus & Kitayama, 1991)、パフォーマンスと他者との比較が不可分な概念と捉えられた可能性がある。一方、本研究で社会的自尊心因子に負荷量の高かった4項目は全て評価懸念に関わる項目であった。パフォーマンス自尊心と社会的自尊心の因子間相関は0.35であり、正の相関はあるもののある程度の弁別性を持っていると言えるだろう。

もう1つの可能性は、オリジナルのHeatherton & Polivy (1991) の因子構造が安定したものでなかったというものである。オリジナルで社会的自尊心因子であり、本研究で外見的自尊心因子に負荷量の高かった項目は、「自分自身に不満を感じている」であった。この項目だけを見ると解釈が難しいが、外見的自尊心因子にはオリジナル、本研究ともに「自分に満足している」「他の人たちが自分を尊敬し、評価していると思う」という項目も含まれており、外見的な項目のみが含まれているわけではない。これらの項目は内容的には外見的な自尊心というよりは全般的な自尊心に関するものであり、測定ごとに異なる因子への負荷量が高くなっても不思議ではないと考えられる。また、前述した他者との比較に関する項目も、パフォーマンス自尊心と社会的自尊心のいずれとも関連する概念であり、測定ごとに安定しない可能性がある。

上記の2つの意味で、下位の尺度構造についてはオリジナルと同様の構成にすることは適切ではないと考えられる。そのため、本研究で訳出した尺度を用いる場合は、全項目の総合得点のみを用いることが適切であろう。特に、本研究では国際比較研究や既存の研究知見との比較を行える尺度の構成が目的であるため、サンプルによって構造が変わる可能性の高い下位尺度は用いづらい。以下では、状態自尊心得点としては全項目を加算平均した総合得点のみを用いる。

他の指標との相関

状態自尊心尺度と特性自尊心尺度との相関を検討したところ、Rosenbergの尺度との間に有意な正の相関 ($r = .791$) が見られ、Tafarodiらの尺度においても、自己好意 (SL) との間に.739、自己競争性 (SC) との間に.637と、いずれも有意な正の相関が見られた。Heatherton & Polivy (1991)、館・宇野 (2000) とともに特性自尊心尺度との相関は.80前後であり、本研究においても同様の結果が見られた。ただし、研究1では既存の状態自尊心尺度である阿部・今野 (2007) の尺度が含まれておらず、状態自尊心尺度間の併存的妥当性は検討できていない。研究2においてその検討を行う。

また、情動状態との関連を検討するために、状態自尊心尺度と日本語版PANASの相関係数を算出した。その結果、ポジティブ情動との間には有意な正の相関 ($r = .497$)、ネガティブ情動との間には有意な負の相関 ($r = -.506$) が見られた。ポジティブ情動を感じているときには状態自尊心が高く、ネガティブ情動を感じているときには状態自尊心が低くなっているため、この結果は状態自尊心の理論的前提と一貫している。ただし、ポジティブ情動、ネガティブ情動ともに特性自尊心の尺度とも同様の相関を示しているため、特性自尊心との弁別的妥当性はこの分析からは確認できなかった。

研究 2

研究 2 では、本研究で作成した状態自尊心尺度日本語版が状態自尊心の変動を検出できるかを検討することを目的とする。具体的には、ポジティブ・ネガティブな概念を活性化させるプライミングを行い、両群の状態自尊心に差が見られるかを検討する。また、研究 1 に含まれなかった既存の日本語版状態自尊心尺度である阿部・今野 (2007) との相関を検討し、状態自尊心尺度間の併存的妥当性の検討を行う。

方 法

2015年6月、関西の私立大学2大学の学生203名(男性75名、女性128名)に対し、心理学の講義の時間に質問紙実験を実施した。教示によって質問紙への回答は自由意思で行われること、個人の特定は不可能であり成績とも無関連であることが説明された。なお、不完全回答を除外した195名の回答を分析に用いた。

実験操作

ポジティブ概念、ネガティブ概念の活性化は乱文構成課題を用いたプライミングによって行った。ポジティブ概念活性化条件、ネガティブ概念活性化条件、統制群の3群を設定し、それぞれ5つの語から4語を選択して文章を作成する乱文構成課題を10問行った。ポジティブ概念活性化条件では、他者から認められたり課題を達成したりする状況の文章を作成する課題を行った。一方、ネガティブ概念活性化条件では、他者から失望されたり課題に失敗したりする状況の文章を作成する課題を行った。統制条件では、達成や失敗等とは無関連な文章を作成する課題を行った。いずれの条件でも、10問中2問はフィラー課題として実験操作とは無関連な語を用いた。

測定に用いた尺度

研究 1 で作成した状態自尊心尺度と、阿部・今野 (2007) の日本語版状態自尊感情尺度を用いた。

実験教示

実験者は、実験は2部構成になっており、それぞれ異なる目的の課題であると教示した。第1部(乱文構成課題)は4分間の回答時間が設定されており、回答者には開始と終了の合図を守ること、回答が終了した場合でも第2部には進まないことが指示された。また、第2部の開始が指示された後は、最後まで自分のペースで回答するよう教示された。

結果と考察

状態自尊心の2つの指標についてそれぞれ加算平均で得点を求め、条件ごとに平均値と標準偏差を算出した(表3)。続いて、各状態自尊心指標を従属変数として、プライミング条件を独立変数とした1要因3水準の分散分析を行った。その結果、本研究で作成した状態自尊心尺度($F(2, 185) = 0.76, n.s.$)、阿部・今野(2007)の状態自尊感情尺度($F(2, 193) = 0.76, n.s.$)ともに条件の有意な効果は見られなかった。

以上の結果より、本研究からは状態自尊心尺度が自尊心の変動を検出できるかについては確認できなかった。阿部・今野(2007)の尺度は評価的フィードバックによって得点変動することが確認されているにもかかわらず、本研究では条件の効果が見られなかったことから、本研究の

プライミング操作が弱かったことが条件間の差が見られなかった要因であると考えられる。

条件間の差が見られなかったため、尺度間の相関の検討は条件ごとに分割せず全参加者のデータを用いて行った。本研究で作成した状態自尊心尺度と阿部・今野（2007）の尺度の間には有意な正の相関（ $r = .786$ ）が確認された。このことから、状態自尊心尺度間の併存的妥当性が確認されたと言える。

表3 条件ごとの状態自尊心得点の平均値及び標準偏差

尺度	プライミング					
	肯定的		否定的		統制群	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
状態自尊心尺度	2.60	0.57	2.69	0.54	2.71	0.51
阿部・今野(2007)	2.96	0.94	3.17	0.83	2.95	0.82

総合考察

本研究では、Heatherton & Polivy（1991）の国際比較研究に耐えうる日本語版項目の作成を行い、その内的一貫性と妥当性を検討することを目的とした。まず、内的妥当性については、全項目の総合得点については十分な信頼性が得られ、オリジナルと類似した因子構造が得られた。一方で、各因子に含まれる項目が20項目中3項目で異なっており、各下位尺度についてはオリジナルと同様の形にはなっていない。この構造の違いには、日米の自己概念に関する文化差に加え、オリジナルの因子構造が不安定であることの影響も考えられる。そのため、国際比較研究における尺度の利用にあたっては、総合得点のみを用いることが望ましいと考えられる。

また、研究1、研究2を通じて行った関連指標との相関の検討を通じた併存的妥当性、構成概念妥当性の検討では、特性自尊心尺度、情動指標、他の状態自尊心尺度との間に理論的に想定される相関が見られており、十分な妥当性があると言える。

一方、本研究からは状態自尊心の変動に伴って尺度値が変動することの直接的な証拠は得られず、この点は今後の研究における課題となる。既にこの点で妥当性が確認されている阿部・今野（2007）の状態自尊感情尺度と高い相関を示しているが、操作をより強くして直接的に状態自尊心の変動を検出できることを示す必要があるだろう。

状態自尊心はその理論的な重要性が高いにもかかわらず、その測定方法は十分に整備されているとは言いがたい。本研究で新訳を作成したHeatherton & Polivy（1991）の尺度に対しても複数の領域の自己評価を合計するという構成に対して全体的な（global）自尊心を測定できていないのではないかと批判があり（阿部・今野，2007）、理想的な尺度ではないかもしれない。しかし、現状では国際的に代表的な状態自尊心尺度のひとつであることは間違いなく、本研究は状態自尊心に関連した国際比較研究の促進に寄与することができるだろう。

注

- 1) 状態自尊心の測定は他の手法でも行われている。ただし、それらの研究では個別の研究に特化した測定法となっており、他の研究で応用することが難しい。

引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, **16**, 36-46.
- Baumeister, R. F. (1998). The self. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.) *The handbook of social psychology*, 4th ed., Boston: McGraw-Hill. 680-740.
- Bosson, J. K., Swann, W. B. Jr., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 631-643.
- Cousins, S. D. (1989). Culture and self-perception in Japan and the United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 124-131.
- 遠藤由美 (1999). 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, **39**, 150-167.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464- 1480.
- Heatherton, T. F., & Polivy, J. (1991). Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 895-910.
- 小林知博 (2004) . 成功・失敗後の直接・間接的自己高揚傾向 社会心理学研究, **20**, 68-79.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.). *Advances in experimental social psychology* (Vol. 32, pp. 1- 62). San Diego: Academic Press.
- Leary, M. R., Tamber, E. S., Terdel, S. T., & Downs, D. L. (1995) Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological review*, **98**, 224-253.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rudman, L. A., Dohn, M. C., & Fairchild, K. (2007). Implicit self-esteem compensation: Automatic threat defense. *Journal of Personality and Social Psychology*, **93**, 798-813.
- 佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版PANAS の作成 性格心理学研究, **9**, 138-139.
- 舘有紀子・宇野善康 (2000). 日本語版状態セルフ・エスティーム尺度の検討 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 206-207.
- Tafarodi, R.W., & Swann, W. B. (2001). Two-dimensional self-esteem: theory and measurement. *Personality and Individual Differences*, **31**, 653-673.
- 田中道弘・上地勝・市村國夫 (2003). Rosenbergの自尊心尺度項目の再検討 茨城大学教育学部紀要 (教育学), **52**, 115-126.
- van de Vijver, F., & Leung, K. (1997). *Methods and data analysis for cross-cultural psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Summary

Despite the theoretical importance of state self-esteem, the measurements of state self-esteem have not been adequately provided. The purpose of the present study is to develop a Japanese version of the state self-esteem scale which can be used in international comparison. In this study, we translated the state self-esteem scale developed by Heatherton & Polivy (1991), retaining language equivalence. Study 1 showed that the new translated scale had high internal consistency. On the other hand, the subscales were not consistent with previous studies. From the results of studies 1 and 2, it was indicated that the scale has high concurrent validity.

【Key words】 state self-esteem, reliability, validity